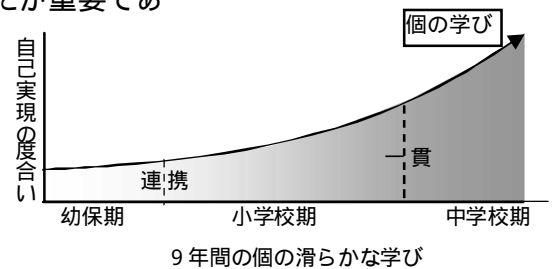


「小学校教師は丁寧に指導する割には、基礎学力を定着させていない。」「中学校の授業は、教える場面が多く、話し合うなどの発言する場面が少ない。」これらは、かつて授業参観後に聞いた感想である。中学校の入学時、学習規律や集団規律が身に付いていない生徒が多いという声も依然と多い。また、専科授業や部活動など、小学校にはない教育活動に戸惑いを表す子どもたちもいる。これまでも、中学校ブロック内で、このような校種間での学習指導法のあり方や生徒指導上の問題点などを指摘することが少なくなかった。

これらの問題を解消するためには、各校種だけで対応するのではなく、小・中学校の全ての教職員が協働して、子どもの側から学校生活をとらえ直し、子どもの基礎学力の保障、そして個性や能力を伸長することが重要である。そのためには、人や環境の変化で生じる子どもたちの不安を取り除き、安心して楽しく過ごせる学校づくりが急務である。その方途の一つとして、子どもの学びを義務教育9年間というスパンでとらえ直し、小・中学校の学びをつなぐカリキュラムづくりを考えている。



まだ、試案であるが、まず9年間で育てる目標を設定する。次に、前期(1～4年生)、中期(5～7年生)、後期(8・9年生)という発達の段階を考慮しながら、子ども像や身につけたい力、学習・生活などに関するカリキュラムをつくる。その際に、学習・生活のカリキュラムが段階で求める子ども像と関連していることが肝要である。当然、各学年間の連続・発展というつながりも留意し、学年末は達成・新規・継続を吟味したい。一朝一夕、小・中学校をつなぐ学びは完成しない。9年間で確かな学力を身に付けることを小・中学校の教員全てが自覚したその時から、つながる学びの構築が始まる。校長のリーダーシップがますます重要になる。(芝)

9年間のつながるカリキュラムの全体イメージ

学園目標											
学年	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	第7学年	第8学年	第9学年		
求める子ども像	前・中・後期でめざす子ども像を設定し学習・生活を通して育てる。										
学年重点目標 身に付けたい力	<p>前期(第1～4学年)</p> <p>全ての教育活動において、その基礎・基本の定着が重視される時期である。入学期には、園の成果を活用し、楽しい学習活動の構成と学習規律に育成が重視される。</p> <p>ここでは、学年のつながりを学級担任は確実に進行が必要があるが、第4・5学年の新しい接続期について共通理解したい。</p>				<p>中期(第5～7学年)</p> <p>小学校と中学校の接続期であり、小・中一貫教育の重点研究期である。</p> <p>ここでは、子どもの学習意欲や人間関係など内面理解を核にしながら、生きる力の育成と授業向上などをめざしたい。</p> <p>また、特定の教科担任制を導入と年間60時間程度の相互乗り入れ授業を試み、基礎基本を総動員させながら、例えば子どもたちに選択する力などを身に付けさせたい。</p>			<p>後期(第8～9学年)</p> <p>小・中一貫学校でくらす子どもたちの完成期であり、プライドを育てるとともに、下級生が憧れる存在にしたい。そのためには、友だちとの協同の営みや所属意識を育て、合意形成や意思決定の方法を重視したい。特に、将来を見据えた進路を自ら考えることができるようにしたい。</p>			
学 習 内 容 が 学 年 の 重 点 目 標 や 求 め る 子 ど も 像 を 意 識 し た も の に な っ て い る こ と。										<p>ここは、学年カリキュラムを意味する。つまり9校の学年カリキュラムが繋がっている。</p> <p>隣接学年の接続・発展を考慮すること。</p>	
学 校 生 活 学 習 ル ー ル 生 活 ル ー ル											
家庭・地域の共通事項等											

教育課程は、あくまでも全体計画や年間指導計画という計画レベルのみであるが、カリキュラムは計画・実践・評価・改善の4つのレベルを含んでいる。